

年間第 29 主日

世界宣教の日

福音朗読 マルコ 10・35-45

2024.10.20 9:30 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

今日の福音も、イエス様がエルサレムの都に向かっている旅の途中の出来事としてマルコの福音書の中には出てきます。もうエルサレムの近くまで来ている。そういう期待の中で、12人の弟子の中の2人、ヤコブとヨハネ兄弟がイエス様に「栄光をお受けになるときは、自分たち二人を一人は右に、一人は左に座らせてください」（マルコ 10・37）というふうに願うという、そういう箇所でした。

イエス様はエルサレムに向かわれるのは、たびたび申し上げることですけども、自分を受け入れる人々とだけ共同体を作るのではなくて、自分を排斥して反対している人をも神様は招かれているんだっていうことを決定的にそれを自分の生涯を通して示す、そして父である神様のみこころを生きるために、自分を迫害しておそらく殺すだろう、そういう人々のところに向かうっていう、父である神様のみこころを死に至るまで行おうとする旅なわけですが、弟子たちは、都に上ってよいよイエス様が王様のようになるっていう、そういう期待をもってついて行ったっていうことはよく言われます。で、その旅の途中で、だんだんイエス様が行った不思議な業の、奇跡の噂を聞いたり、実際に体験した、そういう人たちが一行に加わって行って、一つの一団となつてよいよ都に向かつていくっていう、そういういわゆる意味での「栄光」、この世の栄光——「どうだ」、「おそれ入りました」ってみんながなるような——そういうようなこと期待している。

イエス様のおっしゃる栄光っていうのは、神様はどういう方かっていうのを完全に示すこと、そういう意味での、言葉は同じだけれども意味は全然違う「栄光」なんです。

弟子たちは、「一人は左に、一人は右に」——日本風に言うならば「わたしたちを右大臣と左大臣にしてください」——そういう望みですが、イエス様からしたら、その栄光をお受けになるときの右と左には誰がいたのか。イエス様が十字架に付けられる、その時が栄光を受けるときっていうのは、ヨハネの福音書がはっきり示していますけども、マルコの福音書でも同じです。その時には強盗と一緒に十字架に付けられた、と。「一人は右に、一人は左に」っていう、今日

の弟子たちが願ったおんなじ言葉を福音書は使っています（マルコ 15・27）。だから、この箇所とつなぎ合わせて考えるように招かれています。

マルコの福音書では、この一人は右に、一人は左に十字架に付けられた強盗は二人とも群衆と一緒にあってイエス様をののしったっていうふうに出てきます（マルコ 15・32）。片や信仰を持ち、片やイエス様をののしるってというのはルカの福音書のお話で、マルコの福音書は二人ともイエス様をののしった——「救い主」って言ってたのに、なんにも願いが叶わないじゃないか。救い主じゃないのに、嘘つきやがって、ということですね。ののしられたということです。

その時に、弟子たちのほうはと言えば、みんな逃げてしまっている、ということになります。でも、イエス様が十字架の生涯を、完全に父である神様のみこころへみんなを招くっていうその姿を示しそして復活した、その後^{あと}にヤコブとヨハネは、ヤコブは——聖書の中に出てきます（使徒言行録 12・1）——十二人の中で最初に殉教している、信仰のために殺されているし、ヨハネについては最後——教会の言い伝えによれば——パトモス島に島流しにあって、そこで亡くなるっていう、十二人の中で一番最後まで生きたっていうふうに伝えられています。そういう意味で、最初に殉教して、そして最後に殉教する、右と左っていうことが実現するわけです。

でも、この十字架の場面では、ほんとはイエス様だってヨハネとヤコブが最初にイエス様のこの旅の意味を理解しておんなじようについて行って欲しいなあというふうには思ってたかもしれません。でもそうなれば、強盗ではなくてヤコブとヨハネと一緒に十字架に付けられたら、その後^{あと}の世代に信仰を伝えるってことがなかったかもしれません。ヨハネの福音書しにても書かれなかったかもしれない。そういうことを思うと、神様は人々がイエス様のことを理解しない、弟子たちが理解しなくてイエス様について行けないってことをも用いて、それをより良い恵みが広がっていくように、後^{のち}の世代に、そして他^たの人々にイエス様のことが伝えられるようにお用いになったというふうに考えることができるし、また、旅の途中で弟子たちが自分と全然違う思いでエルサレムに向かっているってことが明らかになっても、イエス様は「そういうことなら、全然違うから、あなたたちのつもりで上ってるんじゃないから、エルサレムにはわたし一人で行くから、あなたたちはもうガリラヤに帰りなさい」とは言わないんですよ。

自分がエルサレムに向かうほんとの意味は、仕えられるためではなく仕える、そういう者として行くんだということを弟子たちが分からなくても忍耐強く説きながら、でも一緒に旅の道連れとしてともに歩まれるということなるわけです。イエス様が弟子たちを決して、その時には自分とおんなじ心ではなくても見捨てることなく、そして父である神様はそういうふう間違えて逃げてしまったり、そういう弟子たちの弱さをも用いて、でもご自分のご計画の中でより多く

の人に信仰を伝える、その準備の時としてその無理解を用いられたと言うことができるんじゃないかと思います。

わたしたちも、今日、イエス様とともに、イエス様に従うってという思いを、御聖体を拝領する、またこのミサに集まるということで表現しますけども、心の中には必ずしもイエス様と同じことを目指している、望んでいるとは限りません。しかし、だからといって、たとえば御聖体が拝領しようと思ったらどうしても口に入ってこないとか、手に渡そうとしたら、心が違うからといって御聖体が逃げて行ってしまうということはない。どんな人のところにも、聖体拝領しようとするならばイエス様が来られる。物質だから当たり前じゃないかと言うかもしれませんが、イエス様はそういう存在にご自分の望みによってなられたわけです。

だから、イエス様はわたしたちの心がどんなであっても、でもともにあるっていうことを示し、そしてその中でわたしたち自身がやがてご自分と同じように仕えられる者ではなく仕える者になっていく、あるいはそういうことに心を開いていくのを絶望することなく待っておられるという、そのイエス様のわたしたちに対する希望を御聖体というのは表してくれていると思います。

今日は、冒頭にも申し上げましたけれども、「世界宣教の日」になっています。それぞれ世界各地でこのイエス様の教えを伝えるための働き、いろんな業のために献金も呼びかけられているわけですけども、教会の宣教活動が、今日の福音に出て来たヤコブやヨハネのように、なにか^{ほか}他の人を圧倒するような、みんなを「おそれ入りました」って言わせていやでも応でも従わせる、そういうような力を見せつけるようなものではなくて、イエス様が歩まれたほんとの意味での仕える者になっていく、お互いのために助け合うっていう心を、まず私たちの心の中に広がり、そして世界の中に、それが大切なんで、それこそが人類が保たなければならない価値なんだということを、目に見える形で示し続ける、そういう者でありますように、わたしたち自身の回心と、教会が絶えずイエス様のみことろと一致してほんとの意味での宣教を続けることができますように、このごミサを通してイエス様の導きと、そしてわたしたちが心を開くことができるように、そのための助けを願いたいと思います。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>